

十一段目 光明寺焼香の段

じゆう じゆう

柔よく剛を制し弱よく強を制するとは、張良に

ちようりゆう

せつこう

石公が伝へし秘法なり。※1 塩谷判官高定の家臣、大

星由良助これを守つて一味の勇士四十余騎。着た

る羽織はおりの合印あいはりしいろはにほへとと立ち並ぶ※2

「いかに方々この首一つ見んために、妻を捨て

せんしんばんく※3

子に別れ、千辛万苦の甲斐あつて、亡君にもさ

ぞ御満足。今日はいかなる吉日ぞや。年来の望

みを達せし」

ことわり

と一同にわつと嬉し泣き理至つて道理なり。※4 由

くすんごぶ※5

良助懐中より九寸五分取り出だし、師直が首もろ

とも御墓みはかに供へ奉りたてまつ

「恐れながら亡君尊霊へ申し上げ奉る。さんぬ

る御切腹の折柄より御無念を晴らし奉らんと、

昼夜忘るゝ隙ひまもなく、わざと遊興ゆうきやうに日を送り、

やから※6

諸士の剛健を試し見るうち。不忠の族はみな逃

げ失せ、わづかに残る四十余人。心を一致に

こんにちただいま

今日只今御形見にと下されしこの短刀にて、師

直が首かき切り御位牌ごいはいへ手向け奉る。草葉くさばの蔭かげ

※7

にて御受取り下さるべし。ア、イザくゝ方々御

一人づゝ御焼香」

「アイヤ先づ惣大将の御自分様より」

※8

「イヤくゝさあらば先づ拙者せつしやより先へ矢間

十太郎殿、イザ御焼香なされ」

※1 しなやかな物が、か

たい物の鋒先をそらし

て、結局勝つことにな

る。柔弱な物が、かえつ

て剛強な物に勝つこと

になる、という戦法は、

漢の張良が黄石公から

伝えられた秘法である。

兵法の秘書『三略』に

よる。

※2 戦場で敵味方の区

別をはつきりさせるた

めに、袖や武装の一部

につける目印。

※3 いろいろと苦しみ、

さまざまな難儀や苦勞

にあつて。

※4 非常にもつともな

ことである。

※5 長さが九寸五分(約

二十八・五センチメー

ル)の短刀。戦場で敵

を刺し、また、切腹す

るときにも用いられた。

「それは又存じも寄らず、いづれもの手前※1
御鼻肩ごひいき※3かえは却つて迷惑※4」

「ナニサ鼻肩なになさにあらず。四十余人の衆が師直が
首取らんと、一身を抛なげうつ中に貴殿一人いちにん。柴部屋しばべや
より見出し、生け捕りになされたはよくく主
君尊靈のお心に叶かなひし矢間殿。御羨うらやましう存ず
る。なんといづれもさやうにてはござるまいか」
「いかにも御尤もに存じます」

「それはなんとも」

「ハテさて時刻が延びるイザとくく」

「ハア然らば御免※5」

と立ち上り一の焼香ぜひなくく

「二番目は由良助殿、イザ御立ち」

と勧むれば

「アイヤまだ外に焼香の致す人あり」

「そりや何者誰人なにものたれびと」

と、問へば

大星懐中より碁盤縞ごばんじま※6の財布取り出だし

「これが忠臣二番目の焼香、早野勘平はやのかんぺいが成れの
果はて※7。その身は不義の誤りから一味同心も叶わず。

せめて石碑の連名にと女房売つて金調えととの、その
金故ゆえに舅しゆうとは討たれ金は戻され。せんかたなく腹

切つてあひ果てし。その時の勘平が心さぞ無念
にあつたであらう。金戻したは由良助が誤り。

ハア不憫な最期を遂げさせしと、片時忘れず肌はだ
離さず。イヤナニ力弥りきや、この財布平右衛門へいえもんに渡

※1 思いもよらないことです。思いがけないことです。

※2 皆様方がご覧になる前で。「…の手前」は、ほかにたいする遠慮の意味で用いる。

※3 お引き立て。好意をもつた力添え。

※4 どうしてよいか分かりません。途方にくれます。

※5 それならば、お先に、ごめんくださいませ。それではお先に、お許しくださいませ。

※6 碁盤の目のような縦横同じ大きさの線を組み合わせた正方形の縞模様。

※7 落ちぶれた結果の姿。落ちぶれ果てた姿。

※8 かわいそうな。

※9 わずかの間も。少しの間も。

せよ」

と言葉にはつと子息力弥、平右衛門の手に渡せば

「これはさて勿体ない。^{※1} 御家老様より平にくく」

「コレ平右衛門、妹婿^{むこ}のその方にと、父上の御
氣遣ひなるぞ」

「コレサ平右衛門、思^{おぼ}し召しをむげにせまい。

イザ仕れ」^{つかまつ}※2

と諸士の声々

「ハッ」

とばかりに平右衛門押し戴^{いただ}きさくく

「お情けこもるそのお詞^{ことば}。草葉の蔭よりさぞ有

難^{よづこ}う悦ぶことゝ存じます。冥加^{みょうが}に余る仕合は

せ」^{※3}

と財布を香炉の上に着せ

「二番焼香、早野勘平重氏」^{しげうじ}※4

と、高らかに呼ばはれば、列座の諸士も賞美の

詞^{※5}、末世^{まつせ}末代^{※6}伝ふる義臣、これも偏^{ひとえ}に君が代の、

久^{ためし}しき例竹の葉の栄えを、こゝに書き残す

※1 おそれ多い。身分に過ぎてかたじけない。

※2 無駄にしてはならない。やたらにご遠慮申し上げ、ご厚意を無駄にしてはならない。さあ焼香を。

※3 神仏のおぼしめしにかない、まことにありがたいめぐりあわせでございます。

※4 声高く大声で言う

※5 ほめたたえることばを述べ。

※6 ずっと後の世まで。後世まで。